

第四章 イスラーム社会における喜捨

—中央アジアのカザフスタンを中心に—

藤本透子

はじめに

この公開講座全体のテーマ「功德と喜捨と贖罪」のなかで、本稿では特にイスラーム社会における「喜捨」を中心に取り上げます。イスラームというと、厳格で過激なイメージをもたれることがしばしばありますが、日常生活においてイスラームがどのように実践されているのかということは、意外によく知られていないのではないのでしょうか。喜捨は、イスラーム教徒にとって重要な宗教的行為のひとつです。それと同時に、喜捨は常に他者に対してなされるものであり、きわめて社会的な行為でもあります。どのような世界観に基づいて喜捨がおこなわれているのか、また喜捨が社会的にどのような意味をもっているのか、考えていきたいと思えます。

イスラームの喜捨について検討する前に、他者に与えるという行為について少し考えてみましょう。日々、私たちはもらいものをしたらおすそ分けしたり、お返しをしたり、モノのやりとりのなかで生きています。この贈与という行為について、人類学や社会学の分野では、二〇

世紀前半に書かれたフランスのマルセル・モース (Marcel Mauss) の『贈与論』がよく知られています。「モース 2009」。それまで贈与に関するまとまった研究はなかったのですが、世界各地の事例を集めて分析していくと、実は人に共通の贈与のあり方として、贈物を与える義務、受け取る義務、そしてお返しをする義務の三つの義務があるとモースは指摘しました。実際のところ、私たちはお中元やお歳暮などをもらったなら、何らかのお返しをする場合は多いと思います。結婚式でご祝儀をもらったなら、それに対してお返しをしますし、葬儀のときなども香典返しがあります。

では、仏教でいうところの「お布施」や、あるいはより一般的に「寄付」の場合はどうでしょうか。お布施や寄付は、お返しがないことが初めから分かっている点で、通常の贈与とは異なっています。イスラーム社会でも、お祝い事などの際に贈物をやり取りしますが、その一方で見返りを求めない贈与として喜捨があります。お布施や寄付、あるいは喜捨のように、お返しがないと初めからわかっているにもかかわらず人に与えるという行為は、いったいどのような論理で成り立っているのでしょうか。仏教には仏教の論理があると思いますが、イスラームではどのような論理に基づいて、喜捨が実際におこなわれているのかということを見ていきたいと思っています。

イスラームは西暦七世紀にアラビア半島で生まれた宗教ですけれども、現在では世界各地に広がっており、イスラーム教徒(ムスリム)は全世界の人口のおよそ五分の一を占めています。「ラ

ンデイ 2004: 八」。発祥の地とその周辺にあたる中東から北アフリカにかけての地域で、各国の人口に占めるムスリムの比率は最も高いですが、ムスリムの数が最も多い国はインドネシアであり、イスラームがいかに世界的な広がりをもつ宗教であるかがうかがわれます。本稿でとりあげる中央アジアの場合、八世紀にイスラームが伝播し、その後一六世紀ころまでには現在のカザフスタンの領域全体でイスラームの影響が見られるようになりました【Mustafina 1992: 6, 12】。イスラームは大きくスンナ派とシーア派に分かれています。中央アジアのイスラーム教徒の多くはスンナ派です。

カザフスタン(図1)は、人口約一八〇五万人で(二〇一七年八月現在)、その約七割がイスラーム教徒です。人口の約六六パーセントを占めるカザフ人のほか、ウズベク人、タタール人、ウイグル人などがイスラーム教徒に含まれます。カザフ人に次いで多いロシア人は、人口の約二一パーセントを占めており、主にロシア正教徒で

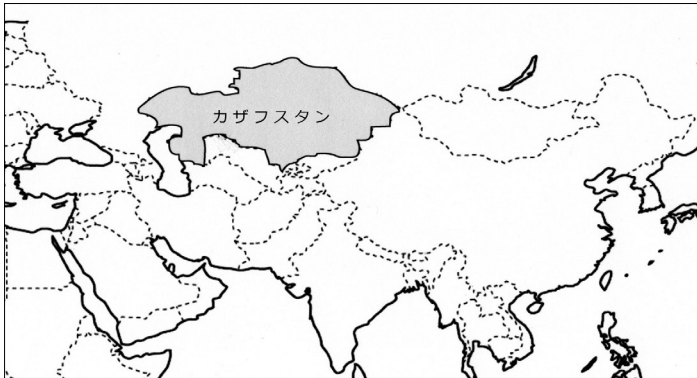


図1 中央アジアのカザフスタン

す [Qazaqstan Respublikasi ültiq ekonomika ministerligi Statistika komiteti 2015, カザフスタン共和国経済省統計委員会HP]。カザフスタンでイスラームに次いでロシア正教が大きな宗教勢力ということになりますが、キリスト教とイスラームの表立った対立は起きておらず、宗教学間の共存が図られてきました。

世界的に見ると、イスラーム教徒の割合が高い国のなかには、イスラーム法を重視した国づくりをしているところもあります。一方、世俗国家ですが、イスラーム諸国会議機構には参加している国も多く見られます。カザフスタンは後者に含まれます。一日五回の礼拝や断食をしている人の割合は低く、日々の暮らしもかなり世俗的です。法律として機能しているのは、イスラーム法ではなく、世俗的な法律のみです。例えば、イスラームの教えでは一夫多妻が条件付で認められていますが、それはカザフスタンの国の法律としては認められていません。また、教義に則った金融システムとして、イスラーム銀行が近代になって考案されましたが、カザフスタンでは世俗的な銀行が機能しています。貧困などが原因となってISにリクルートされる人たちがいることがカザフスタンでも問題になりましたが、おおむねイスラームはゆるやかなかたちで実践されてきました。

カザフスタンでは、一見すると世俗的な生活が営まれているのですが、よく見ていくとイスラーム的な価値観が生活の中に埋め込まれており、本稿の主題である喜捨は、実はかなり頻繁におこなわれています。以下では、イスラームの教義の基本について述べたうえで、カザフス

タンを中心にほかの地域にもふれつつ、喜捨について検討していききたいと思います。

一 イスラームの教義における喜捨

六信五行

イスラームは、アラビア語で「帰依」を意味し、唯一神であるアッラーに絶対帰依することを指しています。イスラーム教徒は、「帰依する者」という意味でムスリムと呼ばれます〔小杉 1994：九～一〇〕。イスラーム教徒にとって重要なのが「六信五行」で、「六信」とは信仰箇条、「五行」(あるいは五柱)は信仰行為を指します〔小杉 1994：七二～七七、八一～八三；東長 1996：六～二五〕。

まず、「六信」は、イスラーム教徒がその実在を信するべきとされる、次の六つの対象です。第一は、唯一絶対神である「アッラー」です。第二は、霊的な存在としての「天使」です。大天使ジブリール(ガブリエル)は、預言者ムハンマド(マホメット)にアッラーの啓示を伝えたとされます。

第三は、啓典です。啓典とは、神から下された啓示が記された書物です。主に『クルアーン(コーラン)』を指しますが、ユダヤ教の律法や、キリスト教の聖書も含まれます。このため、ユ

ダヤ教徒とキリスト教徒は「啓典の民」と呼ばれています。ただし、クルアーン以外の啓典には誤謬（間違い）が含まれていたとイスラーム教徒は考えており、神から下された啓典のなかでクルアーンが完全無比で、神からの最後の啓示であると思われています。

六信の四番目は「預言者」です。預言者とは、神の言葉を預かった人物を指し、神の「使徒」とも言われます。アダム、ノア、モーセ、ダビデ、イエスなども預言者に含まれますが、最後に完璧な方たちで神の言葉であるクルアーンを人々に伝えたのが、ムハンマドだと考えられています。アッラーから啓示を受ける人間として選ばれたムハンマドは、すべてのムスリムの模範とされています。

第五は、「来世」です。これは、私たちが親しんでいる仏教における来世とは異なります。イスラームには、仏教のような輪廻転生の考え方はありません。イスラームにおける来世は、「最後の審判」の後に来るとされています。最後の審判で、人は来世に樂園に行けるか火獄に行くかが決まります。現世はかりそめの生で、来世の生こそが永遠の生であると考えられています。このことは、喜捨という行為を考える上でも大事な点なので、本稿の最後にもう一度取り上げたいと思います。

六信の最後は、「定命」です。これは、「神の予定」とも呼ばれ、アッラーはこの世に起こるすべてのことをすでに知っているということを指しています。ただ、このことによって人が自分の行動の責任からまぬがれるわけではなく、罪を犯した場合にはその報いを最後の審判の際

に受けることとなります。以上述べてきました、アッラー、天使、啓典、預言者、来世、定命の六つを信じるのが、イスラーム教徒にとって大切です。

ところで、信仰は具体的な行為で表さなければいけません。イスラームの五つの基本的な信仰行為が、「五行」と呼ばれています。その第一は「信仰告白」です。具体的には「アッラーのほかには神はなし。ムハンマドは神の使徒である」と言うことを指しています。この言葉を言うことで、人はイスラーム教徒になったとみなされます。

第二は、「礼拝」です。一日五回、暁、正午過ぎ、午後、日没後、夜におこなうことになっています。必ず体を清めてから、メッカの方角に向かって礼拝します。礼拝の手順や唱える言葉などは、細かく定めら



写真1 モスクでの金曜礼拝（カザフスタン、バヴロダル州、2013年）

れています。ふだんは各自が家や職場などで礼拝することが多いですが、金曜日にはモスクで集団礼拝がおこなわれます（写真1）。

五行の第三は、「定めの喜捨」であるザカートです。喜捨は、イスラーム教徒にとって、礼拝や断食などと並ぶ重要な信仰行為のひとつです。喜捨については、本稿の主題ですので次節で詳しく検討することにして、先に五行の第四、第五の項目にふれておきたいと思えます。

第四は、「断食」です。イスラーム暦九月はラマダーン（断食月）と呼ばれ、日の出から日没まで成人は飲食せず断食します。断食という何もしないかのように誤解されることもありますが、日没後にはイスラーム教徒たちが互いの家を訪問するなどして盛大に食事をします。また、断食月の夜にはタラウィーフ礼拝という特別な礼拝が任意でおこなわれます。断食月の一ヶ月間、欲望を統御して心身を汚れない状態に保つべきとされています。イスラーム暦は太陰暦で一ヶ月は二九日ないし三〇日なので、グレゴリオ暦よりも一年が一日程度短く、季節の移り変わりと年々少しずつずれていきます。季節の変化が激しい地域では、断食月が夏にあたるとひとときわ困難で、冬には断食する時間も短くなるのでやや楽になります。ラマダーンが終わると、翌月初めに断食明けの祭りがおこなわれます。

第五は「巡礼」です。イスラーム教徒は、健康で経済的に余裕があれば一生に一度はメッカに巡礼する義務があるとされています。毎年、イスラーム暦一二月八〜一〇日に、世界各地からメッカにイスラーム教徒が巡礼のために訪れます。一二月一〇〜一三日は犠牲祭の期間であ

り、メッカだけでなく世界各地で、イスラーム教徒によって犠牲獣としてヒツジなどが屠られて共食されます。

五行のうち巡礼は、身体が健康で、富を蓄えてメッカまでの旅費を自分でまかなえる人が行けばよいとされていますが、信仰告白、礼拝、断食、喜捨（ザカート）は、イスラーム教徒であれば必ずしなければならない務めであると考えられています。

ザカートとサダカ

喜捨について、ここで詳しく検討していきたいと思います。クルアーン第六四章一五―一六節には、イスラーム教徒に語りかけるかたちで、次のように書かれています。

「アッラーのお手元にこそ（本当の）大きな報いはあるもの。さればお前たち、力の限りをつくしてアッラーを懼れまつれ。よく聴き、よく従い、よく喜捨を出せ。それでこそ身のためはかれるというもの。己（おの）が心の貪欲にどこまでもうち克つてこそ、栄達の道に行けるといふもの」〔井筒訳 2004：二〇五〕。

このように、喜捨することでアッラーから罪を赦されて、来世で楽園に行けることが約束されると、クルアーンでは説明されています。

喜捨には、「ザカート」と「サダカ」があります。ザカートの原義は「浄化」「増加」で、宗教的な罪を浄化して、来世での報酬を増加させる目的でおこなわれます〔森 2002a〕。ザカートは「義務」であるため「定めの喜捨」とも訳されます。一年間所有した財産に対して一定率のザカートの支払いが課せられ、イスラーム教徒であれば必ず払わなければならないとされています。ザカートの対象となる財産は、農産物・金銀・商品・家畜などです。農産物であれば収穫物の一〇パーセント（ただし、灌漑施設を必要とする場合は五パーセント）、金銀や商品については二・五パーセントを喜捨することになっています。家畜は、ウシを三〇頭飼っているのであればそのうち一頭を、ヒツジでしたら四〇頭につき一頭を、ザカートとして喜捨しなければなりません。ザカートは断食月に集められる場合が多いのですが、断食月明けには、財産の多寡にかかわらず一人一定の額を喜捨する「ザカート・アル・フイトル」（断食月明けの喜捨）という、特別なザカートもあります〔Zysow 2002:406-422〕。

ザカートは、財産の偏在を正すという理念のもとで行われ〔Al-Sheikh and Stewart 2009:33〕。受給対象も明確に定められています。貧者・困窮者、ザカート管理人（ザカートを集めて管理する人）、イスラームへの改宗者、奴隷解放のため、負債者、アッラーの道のために努力する者（戦士など）などが、ザカートを受給することができます。また、旅行中は困難な状況にある場合が多いので、旅行者に対してもザカートを使うという規定があります〔森 2002a〕。このように、ザカートは、少なくとも理念的には必ず払わなければならない、困難な状況にある者に対して使



写真2 モスクで喜捨する男性（左端）（カザフスタン、パヴロダル州、2013年）

うと定められています。

これに対して、「サダカ」は義務ではなく任意の喜捨です（写真2）。ザカートのようにきっちりした取り決めはなく、金銭やモノの喜捨のみならず、慈善行為を含んでいます。サダカと見なされる慈善行為は、他人を助けるために時間を割くことや助力を惜しまないこと、親切な言葉をかけること、病人のお見舞いをするなど、知人の葬儀へ参列すること、遺族へ慰めをするなど、非常に広い内容を含みます。旅人のために食事を提供することも、サダカに当たります。サダカの受給対象者もかなり広く、まず自分の家族、扶養者、次いで親族、貧者、困窮者、寡婦、孤児、債務者、旅行者、イスラーム布教者、救助を必要とする一般の人々な

どです。犯罪者および多神教徒や敵対者に対しても、サダカをすることができます [Weir and Zysow 1995:708-716; 森 2002b]。サダカは「特殊の贈与」のひとつとみなされ、「何らかの意味で利他的な目的に充てられなければならない」とされています [柳橋 2012:六〇五]。

ザカートとサダカという二つの喜捨のかたちがあることをふまえて、次節では「喜捨」が実際にどのようにおこなわれているのかを見ていきます。

二 喜捨の実践

時代と地域による変化

歴史上、啓典であるクルアーン（コーラン）や、預言者ムハンマドの言行録であるハディース、ムハンマドが慣行としていたこと（スンナ）に基盤をおいて、イスラーム法（シャリーア）が定められ、イスラーム教徒の生活を規定してきました。歴代のイスラーム王朝は、イスラーム法に則った統治をおこない、政府機関がザカートを徴収していました。ザカートは、国家内部における富の偏在を正す役割を担っていたと考えられます。

しかし、近代に入ると、イスラーム法に替わって世俗的な法律が整備されるようになりました。このため、イスラーム教徒が大多数を占める国であっても、国内法は基本的に西欧にならつ

た世俗的な法律が施行されている場合が多くなりました。その後、極端なまでの近代化への反発として、イスラーム復興の潮流が顕著となり、改めてシャリーアに基づくかたちで国内法を整備するケースも、少数ながら見られるようになりました。

イスラームの教義に厳格に従うことを主張するワッハブ派の人たちが建国したサウジアラビアでは、特に建国当初はザカートが貴重な収入源であったと言えます。現在は石油のほうが収入源として重要であるものの、ザカートも国の財源の一部として集められ続けています。サウジアラビアには、一般に私たちが考える意味での税がなく、サウジアラビア国民にはザカートの支払いだけが義務づけられています。ただし、外国企業に関しては、その限りではありません。「福田 2001」。また、マレーシアなどでも、政府がザカートを集めており、ザカートを社会制度化する動きも見られます「竹野 2005」。

イスラーム法に依拠しない世俗的な法律が施行されている状況の下で、政府自体ではなくイスラーム組織などがザカートを集めて、困窮している人や貧困な世帯に分配していくシステムが採られる場合もあります。例えばインドネシアには、「ザカート管理団体」が数多くあります。そのなかには、政府系の団体もあれば、全く草の根の運動としてザカート管理団体を立ち上げる人たちもいます「足立 2016」。

では、中央アジアの場合はどうでしょうか。一九世紀まで、中央アジアには複数のハン国があり、ムスリム君主がイスラーム法と慣習法に従って統治していました。しかし、二〇世紀に

は、中央アジアは旧ソ連を構成する五つの共和国となり、社会主義の理念に基づいて反宗教宣伝が繰り返し行われました。一九四三年以降は中央アジア・カザフスタン・ムスリム宗務局という公的機関が設けられて、イスラームは限定的に認められましたが、モスクの数は制限されてきました。例えば、ソ連時代末の一九九〇年になってもカザフスタン全体で六三のモスクしかありませんでした〔Sultangalieva 1998:69〕。ソ連政府は、貧困はソ連には存在しないという立場であったため、貧困者のためにザカートをモスクに集めることはできなかったと言います〔Privratsky 2001:89〕。一九九一年にカザフスタン、ウズベキスタン、キルギス（クルグズスタン）、トルクメニスタン、タジキスタンの中央アジア五カ国が相次いでソ連からの独立を宣言すると、これらの国々では伝統の一部としてイスラームが復興しました。ただし、政教分離の原則はソ連時代から受け継がれ、タジキスタンを除きイスラームに基盤をおく政党は認められておらず、イスラームを政府は多かれ少なかれ統制しています。

カザフスタンでは、カザフスタン・ムスリム宗務局が、現在では民間団体に移行し、イスラームの復興と統制の両面を担っています。独立後には数多くのモスクが開設され、二〇一一年には、その数は二二〇〇となりました〔藤本 2015: 一四六〕。これらのモスクでは、ザカートやサダカが集められるようになっていきます。また、ムスリム宗務局によって、社会的弱者への慈善を目的として、二〇一一年には「ザカート基金」も設立されました〔カザフスタン・ムスリム宗務局HP〕。ただ、社会主義を経験していることもあり、カザフスタンのイスラーム教徒

のすべてがザカートを払っているわけでは
ありませんし、ザカート基金の活動も限定
的と見られます。ザカート以上に、日常生
活のなかで広くおこなわれているのは、任
意の喜捨であるサダカです〔藤本 2016: 171-175〕。

モスクに集められる喜捨

実際に、カザフスタンでどのように喜捨
がおこなわれているか、まずモスクを中心
に詳しく見ていきたいと思います。カザフ
スタンの首都は、一九九七年にアルマトウ
からアスタナに遷都されましたが、新首都
アスタナは非常に現代的な外観で、日本の
建築家の故黒川紀章氏が都市設計したこと
でも有名です。二〇一七年夏には、アスタ
ナ国際博覧会が開催されており、日本でも



写真3 カザフスタンの首都アスタナの景観（2013年）

テレビ放送されておりました。高層ビルが建ち並んでいる市中心部には、新しいモスクが点々とあつて威容を誇っています(写真3)。

そのひとつがハズレット・スルタン・モスクで、カザフスタンのみならず中央アジア全体で最大規模のモスクです(写真4)。二〇一三年八月に筆者が行ったときは断食月で、「ラマダーン」と書かれた大きな布が、モスクの壁に掛けていました(写真5)。カザフの民族衣装を身に着けて、スカーフをかぶった年配の女性がちょうどモスクから出てきたところでしたが(写真6)、モスクを訪れる人たちの大部分は、シャツにジーンズなど私たちとあまり変わらないような服装でした。こうした人たちのために、モスクの入り口には、身体をすっぽりと覆う



写真4 カザフスタンの首都アスタナにあるハズレット・スルタン・モスク (2013年)

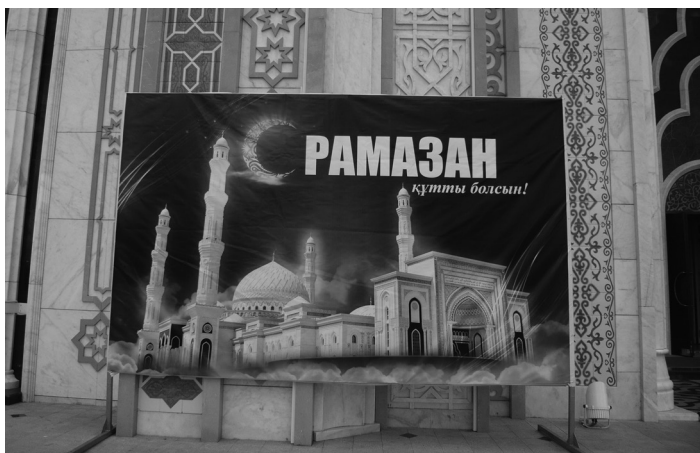


写真5 ハズレット・スルタン・モスクの入口脇には、断食月をしめす看板が設置されていた（カザフスタン、アスタナ市、2013年）



写真6 ハズレット・スルタン・モスクの出入口。カザフの民族衣装を身につけスカーフをかぶった女性が出てきた（カザフスタン、アスタナ市、2013年）

ガウン状の服が用意されており、それを着て中に入ることになっています。モスク内部には、礼拝の時間を示す時計が壁に掛けられ、喜捨をするための箱が設置されていました。また、赤ん坊に礼拝の呼びかけをして名前を知らせる命名儀礼や、イスラーム法に基づく婚姻儀礼なども、モスクでおこなわれていました。

新首都アスタナは現代的できらびやかな雰囲気ですが、実は広大な草原のなかに建設されており、郊外へ少し車を走らせると草原が広がっています。筆者が約二年間滞在していたのは、草原に点在する小さな村のひとつで、アスタナ市から直線距離にして約二五〇キロ離れており、途中のカラガンダ市でバスを乗り継いで八時間ほどかかります。パヴロダル州バヤナウル地区にあり、サルセンバエフ村管区（仮名）といえます。村管区の人口は一二七二人で、九九パーセントがカザフ人です（二〇一七年三月現在）。この村管区は三つの村を含んでおり、村管区の中心地には役場、病院、学校、そしてモスクがあります。

このモスクは、一九九〇年代に村人たちの協力により、ソフホーズ（国营農場）の建物を改築して建てられました。その後、イマーム（集団礼拝の指導者）が中心となり、村人たちからサダカを集めてモスク内部が改装されました。写真7は、二〇一三年に訪れたときのものです。亡くなった人のためにクルアーンを朗唱する儀礼がおこなわれる日でしたので、女性たちはスカーフをしています。写真右側の二人の女性のうちひとり、カザフスタン独立後にイスラームに深く帰依するようになり、毎日礼拝を欠かさず、長袖で長いスカート、頭部から胸部にか



写真7 カザフスタン村落部のモスク（カザフスタン、パヴロダル州、2013年）

けてスカーフで覆うという服装です。もうひとりよりはより世俗的で、毎日の礼拝はしておらず、短めのスカートに半袖の服を着ています。普段はスカーフをかぶっていないのですが、モスクに行く時などにはスカーフをかぶります。女性の服装にもバリエーションがあることがわかれると思います。後者のような女性のほうが、カザフスタンでは一般的です。

カザフスタンの村では、牧畜が主な生業ですから、断食月に集められる「ザカート」のことを「家畜の喜捨」とも呼びます。つまり、家畜は財産なので、家畜を多く所有している人が払わなければいけないのがザカートだと、村の人たちは捉えてきました。これに対して、断食月明けには、財産にかかわらず一人一人が「断食月明けのザカー



写真8 カザフスタン村落部のモスク。喜捨によって建設された（カザフスタン、バヴロダル州、2017年）



写真9 地区中心地のモスク。喜捨によって改増築された。（カザフスタン、バヴロダル州、2013年）

ト」をすることになっているので、そちらのほうは「人（魂）の喜捨」と呼んでいます。

任意の喜捨であるサダカも、さまざまなかたちで行われています。サルセンバエフ村管区のとりのジャンジヨル村管区では、二〇〇八年になってようやくモスクが建設されましたが（写真8）、建設資金はカザフスタンの身体障害者団体の会長を務めた人物が提供しました。これは、サダカにあたります。パヤナウル地区のモスクも、二〇一三年にカザフ人事業家のサダカによって改増築されました（写真9）。まとまった金額の喜捨によってモスクが新築されたり改増築されたりしていることがわかります。

モスクのなかには、お金を喜捨するための箱がいつも置かれています。これを喜捨箱と呼んでおくことにしましょう。例えば、ジャンジヨル村管区のモスクの喜捨箱には、「サダカが



写真10 サダカ（任意の喜捨）を入れるための箱（1）「サダカが（アッラーに）受け入れられますように」と書かれている（カザフスタン、バヴロダル州、2017年）

(アッラーに) 受け入れられますように」と書かれています(写真10)。また、サルセンバエフ村管区のモスクの喜捨箱には、「サダカはあなたの命を延ばし、悪い死から遠ざけます。人知れず喜捨することは、アッラーの怒りをやわらげます」と書かれています(写真11)。実際には、多額の喜捨をした人の実名が公表されている場合もあるのですが、喜捨したことを他人に自慢してはならないとされています。死者のための儀礼が行われる際にモスクを訪れたある女性は、この箱にコインを入れて喜捨していました。モスク内の喜捨箱は、こうした匿名の喜捨を少しずつ集めるための仕組みといえます。

では、モスクに集められた喜捨は、どのように使われるのでしょうか。モスク自体が新築されたり改増築される場合もありますが、より一般的なのは貧困世帯への分配です。バヤナウル地区の地区中心地にあるモスクでは、喜捨されたお金で食料を買い、犠牲祭の時期に貧困世帯



写真11
サダカ(任意の喜捨)を入れるための箱(2)
「サダカはあなたの命を延ばし悪い死から遠ざけます。人知れずサダカをすることはアッラーの怒りをやわらげます」と書かれている。(カザフスタン、バヴロダル州、2013年)



写真12 モスクに喜捨された金銭で食料品を購入し、貧困世帯に配布する
(カザフスタン、パヴロダル州、2013年)



写真13 モスクに喜捨された金銭で購入された食料。植物油、紅茶、砂糖、
米など。(カザフスタン、パヴロダル州、2013年)

に手渡すためパッケージにしてみました（写真12）。植物油、砂糖、紅茶、ピラフ用の米など、日々の食事に欠かせないものが何種類か入っており、一バックを一世帯に持っていきます（写真13）。モスクの経理係を務める男性によると、貧困世帯として登録されている世帯の一覧表を役場からもらい、それをもとにモスクから分配することとした。断食月にはザカートをモスクに持って行く人がいますし、先ほどの「サダカ」と書かれた喜捨箱はいつお金を入れてもいいものなので、少しずつ集められた喜捨がこのようにして貧困世帯に分配されていくことになりました。

その一方で、モスクを直接介さない喜捨として、バザールやモスク周辺などの道端で物乞いをする人たちに、サダカとして小銭を渡すこともよくあります。サダカを受け取った人は、「あなたのサダカがアッラーに受け入れられますように」と言い、健康や長寿などを願う言葉を口にします。また、旅人が来たら必ず食事のもてなしをするというしきたりがカザフにはあり、断食月などに旅人に食事を提供することもサダカとみなされます。親族関係や隣人関係を越えて、見返りを求めない贈与として喜捨がおこなわれていることがわかります。

死者儀礼における喜捨

もう一つ、モスクを介さない喜捨として、カザフスタンの場合に重要なのは、葬儀など死者に関わる場面でサダカがよくおこなわれていることです。以下では、葬儀の様子を簡単に述べ

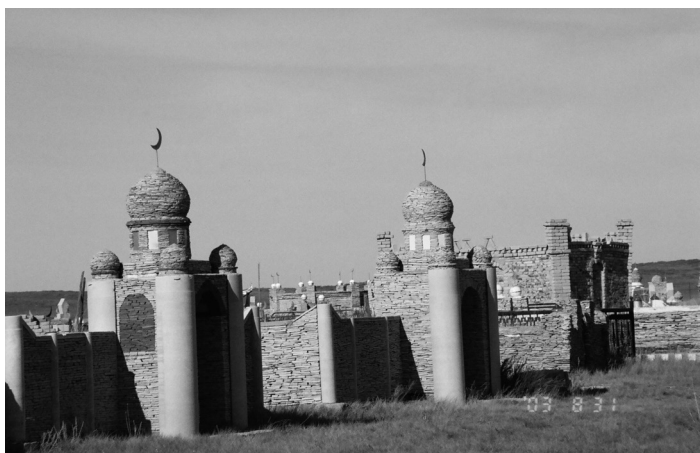


写真14 カザフスタンの村の墓地（カザフスタン、パヴロダル州、2003年）

て、喜捨がどのようにかかっているのか考えてみたいと思います。

葬送礼拝と埋葬の仕方は、イスラームの規範に沿って定められていて、どの地域であっても基本的に変わりません。カザフスタンでも、集団礼拝の指導者（イマーム）やイスラーム知識人（ムッラー）が、葬送礼拝を執りおこないます。その後、死者は墓地に運ばれますが、このとき墓地には男性のみが赴きます。私は女性ですので埋葬に立ち会ったことがないのですが、聞き取りによると、死者はメッカの方向に顔を向けて体の右側を下にして埋葬されます（写真14）。

葬送礼拝の後、カザフスタンでは参列者が食事でもてなされます。男性たちが埋葬のために墓地に行った後、まず女性たちが食事をし、長老女性が食後にクルアーンを唱えます。やがて女性たちが帰ると、入れ替わりに男性たちが墓

地から戻り、食事のもてなしを受け、イマームやムッラーなど指導的立場にある人がクルアーンを朗唱します。

クルアーンは必ずアラビア語で唱えます。アッラーの言葉はアラビア語で下され、それを誤りなく伝えるためにはアラビア語でなければならぬとされているためです。男性は声に出して唱えますが、女性は声に出さず唇のみ動かします。まれに、夫と死別した長老女性は、声に出して唱えることがあります。イスラーム教育機関で専門に勉強した場合には、アラビア語の意味がわかっていますが、一般の人たちは音だけ覚えて唱える場合が多いです。朗唱の仕方は地域によってもやや異なり、スンナ派の最高学峰であるエジプトのアズハル大学に留学して帰ってきたカザフ人が、「彼のクル



写真15 葬儀で布を喜捨する女性（カザフスタン、バヴロダル州、2003年）

アーン朗唱は素晴らしい」と評価されたりします。クルアーンを朗唱した人には、死者の家族から少額の金銭がサダカとしてわたされます。

また、クルアーンが唱えられた後、参列者には布などがサダカとして配られます。「亡くなった人が生前に犯した罪があるとしたら、その罪が赦されるように」という祈りを込めて、死者の家族や親族にあたる女性に布とハンカチと硬貨を配っていきます(写真15、16)。かつては死者の服を配ったそうですが、



写真16
葬儀で参列者に喜捨された布、ハンカチ、硬貨(硬貨はハンカチの結び目に入っている)(カザフスタン、パヴロダル州、2017年)

現在は新しい上質の布に置き換わっています。年配の人たちは、葬儀の時に配るようにと、あらかじめ布などを準備しておくものだと思います。配られた布は、外套や上着、客用の座布団や寝具などさまざまなものに使われます。

葬儀の後、カザフの場合は、七日忌、四〇日忌、一年忌を必ずおこないます。これはクルアーンに書かれていることではなく、地域の習慣です。七日忌、四〇日忌、一年忌の際にも、参加者を食事でもてなし、食後にクルアーンを朗唱します。死者儀礼の際に食事を提供することも、広い意味でサダカに含まれるとみなされています。また、断食月には日没後に盛大に食事をし



写真17 聖者廟で死者のためにクルアーンを朗唱して食事をふるまう
(カザフスタン、南カザフスタン州、1999年)

て死者のためにクルアーンを朗唱します。カザフスタンの場合は年長者と一部の若者だけが断食することが多いですが、断食している人たちを家に招いて食事をふるまうこともサダカのひとつのかたちと捉えられます。また、イスラームの聖者とされる人の墓廟（聖者廟）に、親族や隣人を呼んできて食事をふるまい、亡くなった家族や祖先のためにクルアーンを朗唱することもあります（写真17）。こうした儀礼をおこなうこともサダカであると考えられています。

古い墓地に墓碑を新たに建設してアスと呼ばれる大規模な死者儀礼をおこなうこともあります。ソ連時代初期まで、カザフ遊牧民は季節移動していましたが、ソ連時代の一九二〇～一九三〇に定住化させられました。遊牧していた時代には冬営地に墓地がもうけ

られることが多く、定住化前の祖先の墓は現在の村から数キロ以上離れています。こうした墓
地はソ連時代にはあまり手入れされなかったため、土葬後に積まれた石が、すっかり崩れ落ち
た状態になっていることもめずらしくありません。墓地が荒れることはよくないと考えられて
いるため、一九九〇年代以降、墓碑を建ててクルアーンを朗唱する儀礼がしばしば行われるよ
うになりました。

アッラーを唯一神とするイスラームの教義では、大規模な墓をつくることは祖先信仰につな
がってしまうのでよくないとされています。例えばサウジアラビアは、イスラームの教義に厳
格に従うことを主張するワッハブ派の人たちを中心となって建国した国で、墓地には点々と
石が置かれているのみです〔大塚 1989: 七一〜七五〕。しかし、その一方で、エジプトのよう
に土や日干レンガ造りのお墓を建て墓参する地域もあります〔大塚 1989: 七五〜七八〕。

カザフスタン村落部では、土葬した後に墓碑を建て、周りを石積みの壁などで囲み、墓参も
します。特に、二〇世紀初頭までの祖先の墓地に改めて墓碑を建てた際などには、多くの人々
が集って、前述のアスという儀礼をおこないます〔藤本 2016〕。まず、古い墓地でクルアーン
を朗唱した後に、死者（祖先）の名前を列挙して、彼らのためにクルアーンを朗唱したことを
述べ、「死者に寛恕を、生者に恩寵を与えたまえ」と祈ります（写真18）。その後、儀礼のため
に張られた天幕のなかで食事をします（写真19）。この食事のために、特別にウマやヒツジが屠
られ、揚げパンが作られます。食事の後には、再びクルアーンが朗唱されます。その後は、草



写真18 大規模な死者儀礼で、祖先の墓地で祈る人々
(カザフスタン、パヴロダル州、2003年)



写真19 大規模な死者儀礼で共食する人々。食後にクルアーンが朗唱された
(カザフスタン、パヴロダル州、2003年)。



写真20 大規模な死者儀礼に伴っておこなわれた馬上競技の様子（カザフスタン、バヴロダル州、2003年）。

原で馬上競技や競馬をします（写真20）。墓碑建設を記念する馬上競技や競馬の賞品として、テレビ、ビデオ、絨毯、現金などが一等から三等までの人に贈られます（写真21）。

このように、死者に関わる儀礼の際に、クルアーンを朗唱して、モノや金銭を喜捨したり食事をふるまったりします。クルアーンには、死者のために儀礼をして喜捨をせよと書かれているわけではありません。イスラームのあり方にも実は地域的な多様性があり、カザフスタンの場合は死者儀礼のときによく喜捨（サダカ）をすることが特徴です。

先ほど、親族が集まって墓碑を建設すると述べましたが、親族のなかでも貧富の格差がありますので、富を持っている人が多くのお金を提供し、貧しい人は労働力を提供するというかたちで儀礼をおこないます。さらに、

親族のみならず隣人も招待して共に祝います。多くの収入のある人だけがお金を独り占めせず、儀礼をおこなって喜捨をすることによって、社会に富を分配していると言えるでしょう。

三 喜捨の意味論

アッラーから受けとる報酬

それでは、喜捨という行為を支えている意味の枠組みとはどのようなものでしょうか。イスラームは、垂直軸と水平軸という言葉で説明されることがあり、垂直軸は神と人間とのあいだの関係、水平軸は信仰を共にするイスラーム教徒どうしとの関係（イスラーム共同体）を指します。喜捨に関して、まず垂直軸から見ると、



写真21 大規模な死者儀礼で、競馬や馬上競技の賞品としてテレビ、ビデオ、絨毯などが渡される。これも任意の喜捨の一種（カザフスタン、バヴロダル州、2003年）。

人が財産を所有するのはアッラーがそれを許しているからに他ならず、財産の一部を信仰の証として差し出すよう求めることはアッラーの権利であると考えられています。その一方で、イスラーム教徒どうしの関係という水平軸では、喜捨は人から人に渡され、困窮している者などを助ける目的をもっています〔小杉 1994：七四〕。

喜捨を受け取った相手からはお返しはありませんが、アッラーから善行への報酬を受けとることができるとされます。クルアーン第二章二七五節には「自分の財産を、夜となく昼となく、ある時はそつと隠し、ある時は堂々と人前で施してやる人たち、そういう人たちは神様のみもとで（立派な）報酬がいただけよう。怖ろしい目に逢うことも、悲しい目に逢うこともなからうぞ」とあります〔井筒 1957：六七～六八〕。礼拝や断食などの善行に対してもアッラーから報酬が与えられるので、アッラーと人とのあいだの関係は贈与（善行）とお返し（報酬）として考えることができます。喜捨は、受け手がほかのイスラーム教徒だけでも、アッラーから報酬をもらえるという、間接的な回路になっています〔大塚 1989：一二三～一二五〕。

カザフスタンでは、モノやお金などを誰かに渡したときに、「アッラーからお返しがありますように」と言われることがあります。「自分からはお返しできないけれども、あなたが見返りを求めずに提供したものに對しては、アッラーから必ずお返しがありますように」という意味です。アッラーからのお返しは、人からのお返しよりもずっと価値があるとされます。ザカートもサダカも、まさにこのアッラーからのお返しを求めてなされます。図2のように、①喜捨す

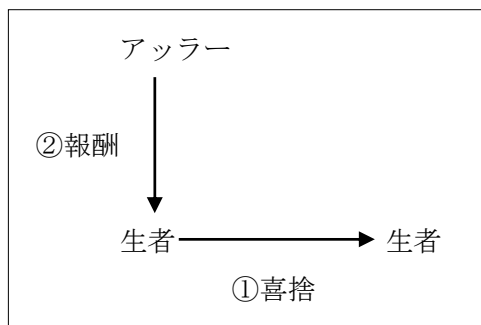


図2 アッラーと生者の関係（イスラーム社会に共通）

ることにより、②アッラーから報酬を受けとることができると考えられています。これは、イスラーム社会に共通して見られる、喜捨をめぐる意味の枠組みです。喜捨は、アッラーの存在を信じることによって、お返しを期待できない相手に対しても贈与をうながしていくくみと言えます。

では、なぜ中央アジアのカザフスタンでは、死者のための儀礼で任意の喜捨（サダカ）が頻繁におこなわれていたのでしょうか。死者は、イスラームの教義では最後の審判を待っている存在であり、生きている人たちに影響を及ぼすことは基本的にできません。しかし、中央アジアの場合は、イスラームが入ってくる前から、死者（特に祖先）を追悼する儀礼をおこなうと、死者の霊魂が生きている者たちを守ってくれるおこなうと、死者の霊魂が満ち足りなければ、生者は豊かにならない」ということわざを、カザフ人はしばしば口にします。つまり、儀礼をおこなうことで、死者の霊魂は満足して生者を守り、豊かな生活をもたらしてくれるという観念があるということです。現在ではイスラーム化しているため、「死者の霊魂が守ってくれる」と直接的に言うとは、死者が生きている人に影響を与えることができないというイスラームの教義に反してしまいます。

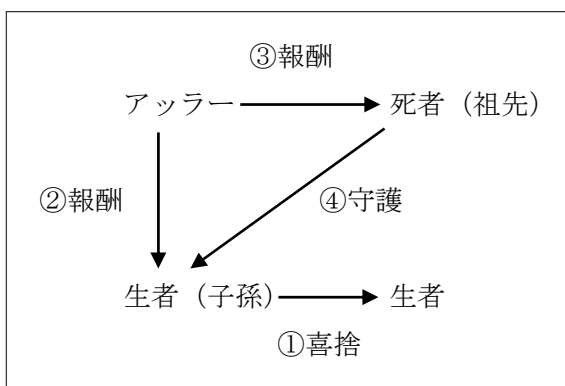


図3 アッラーと生者と死者の関係（カザフの場合）

そこでどのように説明されているかと言いますと、①「死者のためになりますように」と言ってクルアーンを朗唱し喜捨をすると、②喜捨をした本人（生者）にアッラーから報酬があり、③死者もアッラーから報酬を受けとることができるの説明されています。喜捨した人は、④死者からも守護してもらえということになります（図3）。ここで意識される死者は、主に祖先ですが、祖先以外の死者も含まれます。死者のために喜捨するという行為は、他の地域でも見られないわけではありませんが、カザフスタンでは死者の靈魂に関する観念が非常に強いのが特徴です。イスラームのあり方には、実はこうした地域の特徴も見られ、教義の解釈をめぐって議論が続いています。

来世での永遠の生

ところで、喜捨することによってアッラーから受けとることができる報酬とは何でしょうか。それは、来世で楽園に行くことを主に意味しています。イスラームの教義では、現世は一度限

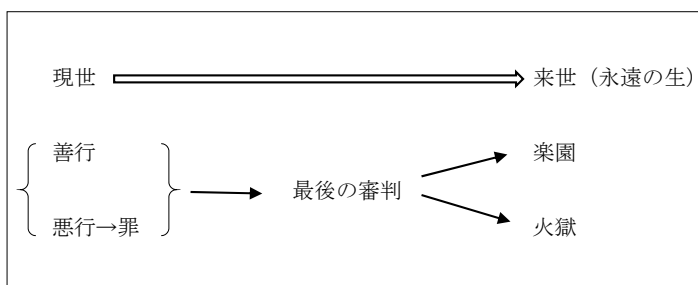


図4 イスラームにおける現世と来世

りのもので、最後の審判の後に来世が来るとされています(図4)。仏教では輪廻転生の観念に基づいて前世・現世・来世がありますが、イスラームには輪廻転生の観念はなく現世と来世のみが存在します。現世で人は良いおこないをすることもあれば、悪いおこないをすることもあります。人の両肩には天使が一人ずついて、一方の天使は善行を帳簿に記録し、もう一方の天使は悪行を帳簿に記録するとされています。

キリスト教でいうところの原罪の観念は、イスラームにはなく、本人が生まれてから死ぬまでの間におこった悪行が罪となります。悪行とは何かと言いますと、殺人や窃盗など一般的に私たちの感覚でも罪だと思われるようなことだけでなく、イスラームの教えに背くこと、イスラームから別の宗教に改宗することなどの信仰が罪となります。また、日常的に食の禁忌(タブー)を守っているかどうか、イスラーム教徒にとっては重要です。クルアーン第二章一六八節では、「死肉、血、豚肉、アッラー以外(の神)に捧げられたもの」を食べることが禁じられています[井筒訳 1975: 四一]。ただし、やむを得ず食べた場

合は赦されます。中央アジアでは、ソ連時代の影響もあって、実は飲酒する人も少なくないのですが、イスラームの教えに従って飲酒しない人も増えてきています。

善行とは、よきムスリムとして生きること、つまり第一節で述べた信仰簡条を確かに信じ、喜捨を含む五つの信仰行為をすること、イスラーム法に則って生活することです。人は現世で一度限りの生を生き、最後の審判のときに裁かれることになります。悪行をしてもった場合にも、アッラーの慈悲により罪を赦されるよう、善行をさらに積み重ねる努力をします。最後の審判がいつあるのかは明言されていませんが、将来、確実にその時は訪れるとされています。

最後の審判によって、人は来世で楽園に行くか、火獄に行くかが決まります。楽園は、泉が湧いて川が流れ、緑があふれて果実がたわわに実っているところとしてイメージされています。オアシスの情景が目につかびますが、それは現世のオアシスをはるかに超えた世界であり、「敬虔な信者に約束された楽園を描いてみようなら、そこには絶対に腐ることのない水をたたえた川がいくつも流れ、いつまでたっても味の変わらぬ乳の河あり、飲めばえも言われぬ美酒の河あり、澄みきった蜜の河あり」とクルアーン第七章で描写されています〔井筒訳 2004：一二六〕。美酒とは、醗酵してはならないという教えと矛盾するように思われますが、来世の楽園の美酒は「飲んでも頭がふらつくでなし、酔っぱらったりする心配もない」（クルアーン第三七章四六節）とされています〔井筒訳 2004：三三八〕。

一方、火獄では、文字どおり火に焼かれて苦しむとされます。「常（とこ）とわまでも火の中

に住み込んで、煮えたぎる熱湯を飲まされ、それで内臓がずたずたに裂けてしまう」と、クルアーン第四章で描写され、楽園との対比が強調されています〔井筒訳 2004：一二六〕。最後の審判によって楽園に行けば、そこで永遠の生を受けられます。逆に、火獄に行ってしまうと、永遠に火獄で苦しみ続けることとなります。来世で楽園に行けるように、自分が生まれてから死ぬまでの間に、イスラーム教徒としての義務や推奨される行為をおこなわなければならず、その一つとして喜捨が重視されていることがわかります。

イスラーム教徒の義務とされることを実際にどれだけおこなうのかは、地域によっても人によってもかなり濃淡があります。カザフスタンでは、一日五回の礼拝をしない人のほうが大半です。社会主義時代に礼拝をしないような社会のシステムがつくられてしまっているので、仕事をもっていると礼拝しづらいからです。一日五回の礼拝はできなくとも、まずは断食から始める人もいます。また、喜捨などのようにできることをして善行を増やしていきます。善行と悪行のノートは死によって閉じられますが、死者のためにクルアーンを朗唱して喜捨すると、それは死者の善行として記録され続け、図3に示されているように、生者も死者もアッラーから来世での報酬を得られるという説明を、カザフスタンではしばしば聞きます。地域による多様性を含みながらも、イスラーム社会において、喜捨は来世で楽園に行くために欠かせない行為なのです。

おわりに―共生のしくみ

ここで最初の問いに立ち返って、喜捨の社会的な意味について考えてみたいと思います。喜捨とは、他人に金銭やモノや食事を無償で与えることであり、見返りを求めない贈与であることが特徴でした。与えた相手から見返りは期待できないけれども、アッラーから罪が赦されて来世で報酬が得られるという説明によって、見返りを期待できない相手に対しても、また全く面識のない人に対しても、贈与を促していくしくみであるといえます。

この点に着目したフランスの学者、マルセル・モースは、イスラーム社会における喜捨は、宗教的な意味を持っているだけではなく、一種の社会保障制度のようなものとしても考えることができる指摘しました〔モース 2009: 二八一―二八二〕。実際に、イスラーム法に基づく国家では、特にザカートが富裕層から貧困層へと富を分配していく役割を担っていました。しかし、近代化とともに政教分離が進み、現在ではイスラーム教徒が多い国でも、ザカートが社会保障制度として機能している事例は、それほど多くありません。カザフスタンでも、ソ連時代の社会保障制度が独立後も受け継がれており、ザカートよりもはるかに重要な役割を担っています。

では、カザフスタン独立後、社会主義計画経済から資本主義市場経済へと体制が移行し、貧富の差が拡大していく状況下で、イスラーム復興の流れを受けて喜捨が改めて注目されるようになったことを、どのように捉えればよいのでしょうか。本稿で述べてきたように、地域社会

でおこなわれている喜捨、特に日常的に広くおこなわれているサダカは、民営化後に一部の人々に偏ってしまった富を再分配する機能を、多少なりとも果たしています。喜捨することは、地域社会の人々が共に生きていく関係を確認する上でも、重要な意味を持つていると考えられます。

喜捨は、イスラームに内包されている共生のしくみです。詳しくみていくと、ザカートとサダカでは、想定されている共生の範囲はやや異なります。ザカートは、受け取る相手が基本的にイスラーム教徒に限定されており、イスラーム教徒の共同体（ウンマ）のなかで富を回していきます。つまり、イスラーム教徒のあいだでの社会的な連帯を強める機能を持つていると見ることができます〔佐藤199〕。それに対して、第二節で言及したように、サダカはイスラーム教徒以外に対してもなされます。実際には、イスラーム教徒以外に喜捨する機会はそれほど多くありませんが、儀礼の場に筆者が同席していると、筆者に対しても何らかのものがサダカとして与えられていました（写真16は、葬儀に出席した際にサダカとしてもらったものです）。また、喜捨箱に金銭を入れると、「あなたのサダカが（アッラーに）受け入れられますように」と言われるのが常でした。イスラーム教徒以外とのあいだでもおこなわれうるサダカは、宗教を越えた共生を促す機能を潜在的にもっています。

イスラームという宗教の枠を超えて考えてみると、根本的に生物としての人は、孤立した個としてのみ生きられるものではありません。人間は社会的な動物であり、利他的行為、より正

確には利他的に見える行為をすることによって、孤立した個としてではなく集団として、社会としての存続を図ってきた歴史をもっています。社会が存続していくために、他者と共生できるように生み出されてきたしくみはさまざまですが、そのひとつの例がイスラームにおける喜捨だと考えられます。

参考文献

- 足立真理 2016 「現代インドネシアにおけるザカート実践の多様性とその管理の二形態」『イスラーム世界研究』九、二六五～二七三頁。
- 井筒俊彦訳 1957 『クルアーン（上）』東京：岩波書店。
- 井筒俊彦訳 2004 『クルアーン（下）』東京：岩波書店。
- 大塚和夫 1989 『異文化としてのイスラーム―社会人類学的視点から』東京：同文館。
- 小杉泰 1994 『イスラームとは何か―その宗教・社会・文化』東京：講談社。
- 佐藤秀樹 1991 『ザカートのデイスコンストラクション―社会連帯・互酬・共同寄託』『国際大学中東研究所紀要』五、三三三～四七七頁。
- 竹野富之 2005 「マレーシアにおけるザカート (Zakat) の社会制度化」『南山考人』三三、四一～七六頁。
- 東長靖 1996 『イスラームのとなえ方』東京：山川出版社。
- 福田安志 2000 「サウジアラビアにおけるザカートの徴収―イスラームの税制と国家財政」『イスラーム世界』五五、七三～九三頁。
- 藤本透子 2015 「移動が生み出すイスラーム動態―国境を隔てたカザフ社会の再編過程から」藤本透子編『現

- 代アジアの宗教―社会主義を経た地域を読む」横浜・春風社、一三一―一九四頁。
- 藤本透子 2016 「カザフスタンにおける喜捨の展開―アッラー・死者・生者の関係に着目して」岸上伸啓編『贈与論再考―人間はなぜ他者に与えるのか』京都・臨川書店、一六一―一八二頁。
- マルセル・モース 2009 『贈与論』吉田禎吾・江川純一訳、東京・筑摩書房。
- 森伸生 2002a 「ザカート」大塚和夫他編『岩波イスラーム辞典』東京・岩波書店、三九五―三九六頁。
- 森伸生 2002b 「サタカ」大塚和夫他編『岩波イスラーム辞典』東京・岩波書店、三九八―三九九頁。
- 柳橋博之 2012 『イスラーム財産法』東京・東京大学出版会。
- ランデイ、ポール 2004 『イスラーム』小杉泰監訳、東京・ネコ・パブリッシング。
- Al-Shiekh, Abdullah and Devin J. Stewart 2009 Zakāt. In John L. Esposito (ed.) *The Oxford Encyclopedia of the Islamic World*, vol.6 pp.31-36. New York: Oxford University Press.
- Mustafina, R. M. 1992 *Predstavleniya, kul'ty, obryady u kazakhov (v kontekste bytovogo islama v yuzhnom Kazakhstane v kontse XIX-XX vv.)*. Alma-Ata: Qazaq universiteti.
- Privratsky, Bruce G. 2001 *Muslim Turkistan: Kazak Religion and Collective Memory*. Richmond: Curzon.
- Qazaqstan Respublikasi Üttiq ekonomika ministerligi Statistika komiteti 2015 *2015 jil basima Qazaqstan Respublikasi xalqining jehelgen etnostari boyınsha sani*. Astana: Qazaqstan Respublikasi Üttiq ekonomika ministerligi Statistika komiteti.
- Sultangaliev, Alma K. 1998 *Islam v Kazakhstane: istoriya, etnichnost', obshchestvo*. Almaty: Kazakhstanskii institut strategicheskikh issledovaniı pri Presidente Respubliki Kazakhstan.
- Weir, T. H. and A. Zysow 1995 Sadaka. In C. Bosworth et al. *The Encyclopedia of Islam*, pp.708-716. Leiden: Brill.
- Zysow, A. 2002 Zakāt. In C. Bosworth et al. *The Encyclopedia of Islam*, pp.406-422. Leiden: Brill.

【インターネット】

カザフスタン共和国経済省統計委員会HP

http://www.stat.gov.kz/faces/mobileHomePage/mobileHomePage?_afdcurl-state=gpdiw102_205&_afcloop=8564816368946797

2017年9月23日最終閲覧

カザフスタン・ムスリム宗務局HP

<http://zeketor.g.kz/kz/page/view?id=1>

2015年8月1日最終閲覧

本稿は、科研費（P16K02028）の助成を受けたカザフスタンでの調査に基づいています。

